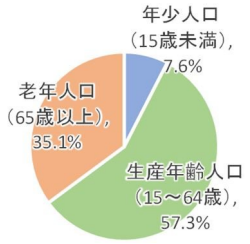
IV-2

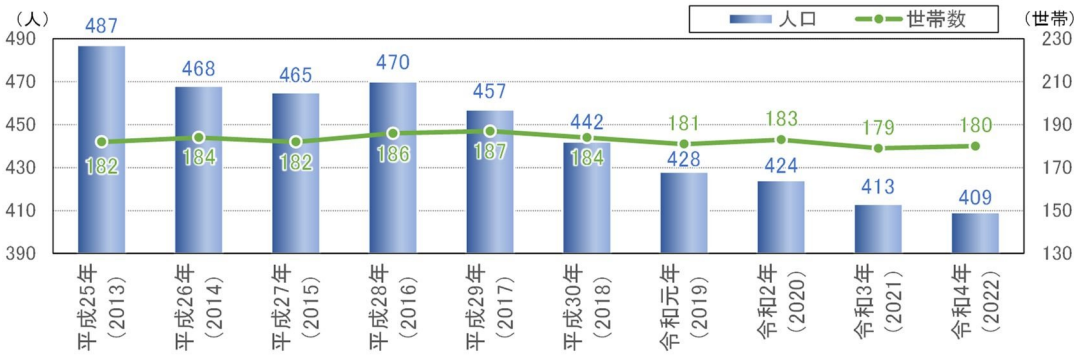
板　　坂　（いたさか）

高岡小学校区

	世帯数	人　口	年齢別人口	
現　在	180 世帯	409 人	15 歳未満（年少人口）	31 人
			15～64 歳（生産年齢人口）	235 人
			65 歳以上（老年人口）	144 人
約 50 年前	98 世帯	493 人		



10 年間の推移



歴史等

古代律令制では播磨国神前郡高岡里に含まれたと考えられます。法道仙人開基の伝承をもつ應聖寺には、白鳳時代（７世紀後半）制作の銅造誕生釈迦仏立像が伝わっています。

中世は高岡荘に含まれたと考えられ、應聖寺は、赤松氏の祈願所として発展しました。近世は豊臣氏の領地となった後、慶長５年（1600）からは姫路藩領となり、大庄屋組は山崎組に属しました。元文２年（1737）の板坂村明細帳によると、家数は 58 軒・人数 427 人でした。明治８年（1875）に神谷村・桜村・長野村・板坂村の４村が合併して高岡村が成立しました。なお、『兵庫県播磨国地種便覧』によると、明治 14 年（1881）の高岡村の戸数は 188 戸・人口は 990 人でした。高岡村は、明治 22 年（1889）に福崎村の大字となりました。

村内を東西に横断する道路は古代から中世を経て、特に江戸期に至っては交通の要所を貫く巡礼道として、多くの往来があったと伝わります。板坂共同墓地前辺りには茶屋が置かれ、地蔵堂もかつての巡礼道沿いに位置して巡礼者の宿にもなっていたこと、また、大正時代初期頃までは巡礼者を宿泊させる家が８戸あったことなどが伝わっています。

應聖寺庭園

宝暦 6 年築造石鳥居の残欠（一之宮神社）

拝殿の絵馬（一之宮神社）

秋祭り・屋台

板坂墓地　萬霊塔

板坂峠の地蔵菩薩立像等

※現在の人口・世帯数・年齢別人口は令和 4 年 5 月末時点、10 年間の人口・世帯数の推移は各年 5 月末時点、約 50 年前の人口・世帯数は昭和 52 年 6 月末時点であり、いずれも住民基本台帳による値です。なお、年齢別人口のみ外国人を含む値になっています。

板　　坂

歴史文化遺産一覧

分類		名称		年代	概要	歴史文化ものがたり					
						①	②	③	④	⑤	⑥
建造物	建築物	1	一之宮神社本殿	寛文 7 年（1667）	当初は七種山に鎮座していたが、祭祀が不便であるため宮ヶ谷、さらには鳥ノ岡へと遷座した。寛文 7 年（1667）に本殿を再建した棟札が残る。その後、大正 2 年(1913)に現在地に遷座した。三棟造り、檜皮葺、高欄付の精巧な本殿である。				●		
		2	一之宮神社山門（麻呂太さん）	不明	随身（神）門。右大臣と左大臣が祀られている。銅板葺。				●		
	石造物	3	三十三ヵ所観音（應聖寺）	明治 19 年（1886）	本堂西の金毘羅宮を祀る山の東南斜面一帯に西国三十三所札所の本尊を写した石仏が三十三基造立され、それぞれに番数と寺名、供養した板坂・桜・長野の檀信徒の名が刻まれている。なお、その最初には西国巡拝道碑（明治 19 年）が設置されている。				●		
		4	子安観音立像（應聖寺）	不明	子安観音の石仏。像高は 140 ㎝（台座・蓮華台を含む）。應聖寺境内の祈願堂への登り口に位置し、左腕に嬰児を抱く観音立像で、慈母観音とも呼ばれる。				●		
		5	地蔵菩薩坐像（應聖寺前）	寛政 8 年（1796）	地蔵菩薩の石仏。台座正面には「法界普潤」と記されている。台座右に願主・施主、左に造立年月日等が記されている。道を尋ねてきた武士に峠は雨が降ると伝えたが、雨が降らなかったために切り殺されてしまった小坊主を供養するために造立されたものと伝わる。				●		
		6	地蔵菩薩立像（板坂墓地）	文化 5 年（1808）	地蔵菩薩の石仏。正面に舟形光背を刻み込み、その中に未敷蓮華（みふれんげ）をかざす地蔵菩薩像を彫り、造立年月が記されている。				●		
		7	地蔵菩薩立像（板坂峠）	天保 8 年（1837）	地蔵菩薩の石仏。正面には像容・造立年月日とともに「得応是聖信士」と記されている。西国三十三所巡礼道の板坂と前之庄三枝をむすぶ峠の途中の石祠内に祀られており、俗に「峠の地蔵」と呼ばれた。				●		
		8	不動明王立像（應聖寺）	不明	不動明王の石仏。本堂裏の庭園に続く西端の池に南面し、行者滝（3m）の上に立つ。修験道の行者が滝行をする際の本尊とされることから「滝不動」とも呼ばれる。				●		

※歴史文化ものがたり：①学問・芸術文化のふるさと、②郷土の暮らし、③ため池・疎水と生業、④祭りと信仰、⑤人・物・情報の十字路、⑥播磨のなかのふくさき

分類		名称		年代	概要	歴史文化ものがたり					
						①	②	③	④	⑤	⑥
建造物	石造物	9	役行者坐像（應聖寺裏山）	明治5年（1872）	應聖寺裏山を東に登った頂上付近にある巨岩の中央部を穿ち、役行者坐像を祀る。正面には像容とともに「加茂役公」の文字と造立年月日が記されている。高さ約80㎝。像を祀る巨岩の前には畳数畳分の広場があり、石造の献灯台（献供台）が造られ、周辺には石垣が積まれている。				●		
		10	名号塔（應聖寺）	不明	高さ90㎝。正面には「南無阿弥陀仏霊」と記されている。本堂西から金毘羅宮に登る山道にある。				●		
		11	三界万霊塔（板坂墓地）	不明	正面には梵字（キリーク）と「万霊塔」の文字が記されている。生死往来する三界の一切の有情の鎮魂の往生を願い、ここでは特に牛馬家畜を葬った慰霊塔である。				●		
		12	石鳥居（一之宮神社）	宝暦6年（1756）	石鳥居。正面に「宝暦六丙子年」と記された残欠。本殿西側の木製赤鳥居の外側に、脚のみが1本ずつ残る。				●		
		13	石灯籠（一之宮神社）	享保2年（1717）	石灯籠。正面には「奉寄進氏子中」、右に「神西郡板坂村」、左に造立年月が記されている。本殿西側の木製赤鳥居の左側に位置する。				●		
		14	石灯籠残欠（一之宮神社）	享保6年（1721）	石灯籠。正面には「奉寄進」の文字とともに造立年月が記されている。令和2年12月時点で崩壊を確認。残骸は残っている。				●		
		15	石灯籠（一之宮神社）	明和9年（1772）	左右一対の石灯籠。左右とも正面には「御神灯」、右灯籠の背面には「明和九」、左灯籠の背面には「壬辰秋」と記されている。随身門手前の石段下に位置する。				●		
		16	石灯籠（板坂峠）	天保4年（1833）	石灯籠。正面には「奉献」、右に造立年月と施主・世話人が記されている。				●	●	
		17	石灯籠（一之宮神社）	昭和12年（1937）	左右一対の石灯籠。右灯籠の正面に「奉」、左灯籠の正面に「献」、いずれも左に造立年月、背面に願主が記され、台石の背面には発起人・世話人が記されている。				●		
		18	石灯籠（應聖寺）	不明	石灯籠。高さ155㎝。本堂裏に広がる庭園の中庭に位置する。宝珠と笠のあたりに石斛が自生している。				●		

※歴史文化ものがたり：①学問・芸術文化のふるさと、②郷土の暮らし、③ため池・疎水と生業、④祭りと信仰、⑤人・物・情報の十字路、⑥播磨のなかのふくさき

板　坂

分類		名称		年代	概要	歴史文化ものがたり					
						①	②	③	④	⑤	⑥
建造物	石造物	19	手水石（一之宮神社）	文化13年（1816）	手水石。正面に「文化十三年子八月吉日　氏子中　世話人文治郎」と記されている。				●		
		20	手水石（板坂峠）	不明	手水石。正面に「奉納」の文字とともに施主が記され、左に造立年月が記されていると思われるが判読できない。				●	●	
		21	手水石（應聖寺）	不明	手水石。高さ56㎝×幅120㎝×奥行56㎝。				●		
		22	狛犬（一之宮神社）	昭和12年（1937）	石造狛犬。				●		
		23	御即位記念碑（一之宮神社前）	大正4年（1915）	大正天皇の御即位記念の石碑。				●		
		24	共有山分割記念碑（旧板坂郵便局横）	大正8年（1919）	共有山分割記念の石碑。石碑の場所は変わらないが、郵便局は移設されている。			●			
		25	御大典記念碑（一之宮神社前）	昭和4年（1929）	御大典記念の石碑。				●		
		26	宝篋印塔（應聖寺）	宝暦10年（1760）	高く基壇を積んだ江戸時代の特徴的な宝篋印塔。高さ約6m。塔身上部には梵字が刻され、塔身本体には唐の不空三蔵訳『一切如来心秘密全身舎利宝篋印陀羅尼経』からの引用文が刻まれている。基壇部には各村の庄屋の名が刻されており、広域な歓進により造立されたことがわかる。				●		
		27	板碑（應聖寺）	康安元年（1361） 貞治3年（1364）	板碑2基。2基とも庭園内に位置し、阿波国板碑の流れを汲む秀作とされる。右の板碑は、阿弥陀三尊の種子を冠し、「康安元年（1361）四月辛丑」の紀年号をもつ。高さ81.8㎝、幅23㎝、厚さ2㎝。左の板碑は、阿弥陀種子を冠し、「貞治三年（1364）八月甲辰」の紀年号をもつ。高さ61.3㎝、幅219.5㎝、厚さ2㎝。				●		
		28	石段標（一之宮神社）	大正3年（1914）	左右一対の石段標。右柱正面に「大正三年」、左柱正面に「一月吉日」と記されている。				●		
		29	石段標（一之宮神社）	大正5年（1916）	左右一対の石段標。右柱正面に「大正五年」、左柱正面に「五月」と記されている。				●		
		30	石棺蓋石（應聖寺）	不明	家形石棺の蓋石。「南無阿」の刻銘あり。					●	

※歴史文化ものがたり：①学問・芸術文化のふるさと、②郷土の暮らし、③ため池・疎水と生業、④祭りと信仰、⑤人・物・情報の十字路、⑥播磨のなかのふくさき

分類		名称		年代	概要	歴史文化ものがたり					
						①	②	③	④	⑤	⑥
建造物	石造物	31	道標（板坂路傍）	嘉永 4 年（1851）	道標。正面には地蔵坐像の像容とともに「右 たぐちなぐさ　左 まいの所安じ」と記されている。				●	●	
		32	道標（旧板坂郵便局横）	明治期（1868～1912）	道標。正面には「右 なくさ　左 □かや」と記されている。道標の場所は変更ないが、郵便局は移設されている。					●	
		33	道標（應聖寺前）	不明	道標。正面には「右 志さふ(カ)」と記されている。西国三十三カ所巡礼道に位置し、應聖寺本尊への献燈を兼ねて巡礼道の常夜灯として造立。現在も地元住民により献燈が続けられており、灯りを入れる部分は新しくなっている（修理時期は確認できず）。					●	
		34	道標（板坂路傍）	不明	道標。正面には「右□□□　左□□□　道」と記されているが、地名は判読できない。					●	
		35	道標（板坂路傍）	不明	道標。正面には「ひだり じゆんれいミち」と記されている。					●	
		36	道標（板坂路傍）	不明	道標。正面には地蔵坐像の像容とともに「右 なぐさ　左 じゆんれいみち」と記されている。				●	●	
		37	石標（應聖寺）	昭和 47 年（1972）	石標。高さ 210 cm、幅 78 cm、厚さ 15 cm（台座を除く）。正面に「沙羅の寺 応聖寺　兵庫県知事　酒井時忠」、背面に造立年月日が記されている。				●		
		38	百度石（一之宮神社）	昭和 13 年（1938）	百度石。				●		
		39	墓碑（應聖寺墓地）	寛文 9 年（1669）	墓碑。正面には造立年月日とともに梵字と「三部阿闍梨祐呈律師」と記されている。江戸時代再興二世祐呈法印の墓。				●		
		40	墓碑（應聖寺墓地）	元禄 12 年（1699）	墓碑。正面には像容・造立年月日とともに「三部阿闍梨快祐律師」と記されている。方形の蓮華台と逆蓮華台とを組み合わせて二重に重ねた台座に特徴がある。				●		
		41	墓碑（應聖寺墓地）	元禄 13 年（1700）	墓碑。正面には造立年月とともに梵字と「智岳浄鏡信士灵位」の文字が記されている。過去帳によると「庄屋平岡平太夫一家内六郎兵衛ノ子」とあり、板坂村庄屋平岡家の歴代墓碑群の中に位置する。墓碑は台座を含め高さ 120 cm。				●		

※歴史文化ものがたり：①学問・芸術文化のふるさと、②郷土の暮らし、③ため池・疎水と生業、④祭りと信仰、⑤人・物・情報の十字路、⑥播磨のなかのふくさき

板　坂

分類		名称		年代	概要	歴史文化ものがたり					
						①	②	③	④	⑤	⑥
建造物	石造物	42	西国巡拝道碑（應聖寺）	明治19年（1886）	24×14㎝。應聖寺本堂西の鎮守堂南に位置する。明治19年（1886）11月現住増田亮海法印代により設置され、板坂・桜・長野の檀信徒代表の名が施主として記されている。三十三所観音像の最初にあり、ここから巡拝した。				●	●	
		43	五輪塔（應聖寺）	室町時代	室町時代造立の五輪塔。高さ75㎝。鐘撞堂の塀の南側、祈願堂へ上る階段途中のコウヤマキの根元に位置する。				●		
		44	善光寺式阿弥陀三尊像（應聖寺）	江戸時代中期	江戸時代中期頃のものと思われる。中央に阿弥陀如来、向かって右に観音菩薩、左に勢至菩薩が一つの光背の中に立つ独特の尊像形体を特徴とする「善光寺式阿弥陀三尊像」であり、播磨地域には珍しい。				●		
		45	宝篋印塔（應聖寺）	不明	宝篋印塔と五輪塔の合体型。高さ103㎝。本来の宝篋印塔の下部である基礎と塔身の代わりに、「地火水風空」を刻した江戸時代の五輪塔の地輪（基礎）を置き、室町時代の五輪塔の水輪（塔身）を重ね、その上に江戸時代の宝篋印塔の上部（竺と相輪）を重ねている。				●		
		46	宝篋印塔（應聖寺）	室町時代	室町時代造立と思われる。高さ87㎝。庭園内にあり、基礎には輪郭が、塔身には金剛界四方仏の種子を持つ宝篋印塔である。				●		
		47	宝篋印塔（應聖寺）	室町時代	刻銘なし。室町時代の宝篋印塔（塔身は後補か）。高さ86㎝。本堂前のクロマツの根元に位置する。				●		
		48	地蔵菩薩坐像（應聖寺）	江戸時代中期か	江戸時代中期の作風と思われる地蔵菩薩の石仏。像高50㎝、蓮華台座・基壇を含めると108㎝。右手に錫杖（今はない）を、左手に宝珠を持ち、切れ長・柔和な顔立ちにして秀麗な姿である。				●		
		49	名号碑（應聖寺）	江戸時代中期か	周辺整備の様子から江戸時代中期の造立と思われる。阿弥陀仏種子の下に六字名号を深く刻んである。その左右に二名の女性戒名が刻まれていることから、その供養碑の可能性がある。				●		

※歴史文化ものがたり：①学問・芸術文化のふるさと、②郷土の暮らし、③ため池・疎水と生業、④祭りと信仰、⑤人・物・情報の十字路、⑥播磨のなかのふくさき

分類		名称		年代	概要	歴史文化ものがたり					
						①	②	③	④	⑤	⑥
建造物	石造物	50	石造献灯台（應聖寺裏山）	明治5年か（1872）	應聖寺裏山を東に登った頂上付近の役行者坐像の前方部にある。役行者坐像の造立と同じ明治5年(1872)造立か。高さ約90㎝。周辺の石垣の積み具合からみて、麓から造立用に運んできた石で積み上げたものとみられる。				●		
		51	六地蔵菩薩像（應聖寺）	不明	記銘なし。像高107㎝。應聖寺門前の放生池前の駐車場西北隅に位置する。				●		
		52	手水石（一之宮神社）	昭和10年（1935）	一之宮神社階段下の鳥居右側に位置する。正面に「奉納」、左側に施主、右側に世話人が記されている。				●		
美術工芸品	絵画	53	四十七士肖像図（一之宮神社）	不明	奉納者は「板坂少年団外村内有志 48名」とある。それぞれ一面に四十七士一人の肖像を描き、い・ろ・は、四十八文字を肖像の下に符号としてつけている。四十面、四十人の肖像が残っている。68.5×46.5㎝。	●			●		
		54	菅原道真図（一之宮神社）	天保3年（1832）	画家は「近平松斉写」、奉納者は「新田日参講中」とある。75.5×101.5㎝。	●			●		
		55	赤穂義士両国橋引上げの図（一之宮神社）	大正15年（1926）	画家は「姫路市元塩町画師巖本寅治」、奉納者は「板坂青年団」とある。140×190㎝。	●			●		
		56	弁慶と牛若丸図（一之宮神社）	天保12年（1841）	奉納月は読み取れない。画家は「應洞円玉鳳」、奉納者は「当村氏子中」とある。三枚之内。109×151㎝。	●			●		
		57	赤穂義士討入の図（一之宮神社）	大正15年（1926）	奉納者13名。139.5×190㎝。	●			●		
		58	明智羽柴山崎大合戦羽波五郎左ヱ門尉長秀憤戦の図（一之宮神社）	明治27年（1894）	奉納者は「当村氏子中」とある。103×174.5㎝。	●			●		
		59	熊谷直実と平敦盛図（一之宮神社）	明治27年（1894）	奉納者は「当村氏子中」とある。82×120.5㎝。	●			●		
		60	十二支図(丑･卯･未･亥)（一之宮神社）	昭和14年（1939）	奉納者は「姫路市東郷町 柴田丈吉」とある。44.5×61㎝。	●			●		
		61	飾馬図（一之宮神社）	大正8年（1919）	画家は「雅□筆」、奉納者は「当宮氏子 山口伊作」とある。鳥居型絵馬。52×58㎝。	●			●		
		62	和歌額（一之宮神社）	不明	奉納者は不明。78×35.5㎝。	●			●		

※歴史文化ものがたり：①学問・芸術文化のふるさと、②郷土の暮らし、③ため池・疎水と生業、④祭りと信仰、⑤人・物・情報の十字路、⑥播磨のなかのふくさき

板　坂

分類		名称		年代	概要	歴史文化ものがたり					
						①	②	③	④	⑤	⑥
美術工芸品	絵画	63	十二支図（一之宮神社）	不明	奉納者は不明。内陣に各一面宛。子図はなし。計11面。54×44㎝。	●			●		
		64	楠公父子桜井の別れ図（一之宮神社）	明治27年（1894）	奉納者は「当村氏子中」とある。66×90㎝。	●			●		
		65	武者絵図（一之宮神社）	不明	画家は「雅□画」、奉納者は「籠類竹細工商 当村山下□一」とある。竹編素地に武者を描く。61.5×48㎝。	●			●		
		66	十六善神図（應聖寺）	嘉永5年（1852）	大般若経転読会の本尊である大般若十六善神を描いたもので、現在も使用されている。木箱には、嘉永5年（1852）の銘文とともに、同年春に盗難にあったため、京都の絵師に描いてもらい、再び奉納されたものであるという裏書がある。	●			●		
	彫刻	67	銅造誕生釈迦仏立像	白鳳時代（7世紀後半）	應聖寺にある仏像で、像高14.1㎝、銅鋳造である。作風から白鳳時代（7世紀後半）の制作と考えられる。兵庫県内で最も古い仏像彫刻の一つであり、この頃に既に高岡に仏教が伝播していたとも考えられる。【町指定有形文化財】				●		
	工芸品	68	随身門狛犬（一之宮神社）	不明	随身門の右大臣・左大臣像の脇に置かれている。木造彩色又は乾漆造りと思われる。				●		
		69	固寧倉の扁額	不明	固寧倉は、元の公民館の北側の一段高い所にあったが、昭和30年頃に老朽化に伴い姿を消した。扁額と鬼瓦のみが残る。			●			●
		70	固寧倉の鬼瓦	弘化2年（1845）	鬼瓦には「弘化二乙巳年三月吉日」の銘がある。			●			●
		71	姫路城主歴代御位牌	－	應聖寺蔵。歴代姫路城主の霊を祀る位牌。この他にも、慶安4年（1651）の徳川家光の御位牌や、徳川秀忠・家光・家綱3代の御位牌がある。應聖寺と徳川家や歴代姫路城主との直接的な関係は不明であるが、應聖寺がそれぞれの祈願所の一つだったと考えることもできる。						●
	書跡・典籍・古文書・歴史資料	72	板坂区有文書	－	69件（点数不明）。		●				
		73	應聖寺文書	－	64件、668点。		●				

※歴史文化ものがたり：①学問・芸術文化のふるさと、②郷土の暮らし、③ため池・疎水と生業、④祭りと信仰、⑤人・物・情報の十字路、⑥播磨のなかのふくさき

分類		名称		年代	概要	歴史文化ものがたり					
						①	②	③	④	⑤	⑥
美術工芸品	書跡・典籍・古文書・歴史資料	74	大般若経（應聖寺）	寛文 10 年（1670）	應聖寺蔵。寛文 10 年（1670）の銘をもつ大般若経 600 巻。大般若経転読会で使用される。巻頭には元文元年（1736）に庄屋平太夫により一之宮神社に寄進されたことが記されている。				●		
		75	一之宮神社拝殿再建棟札	天保 12 年（1841）	77.8×17.8×2.0 cm。				●		
		76	一之宮神社随神門再建棟札	文久元年（1861）	79.0×22.5×1.7 cm。				●		
		77	一之宮神社舞殿上棟棟札	大正 6 年（1917）	135.0×29.2×3.2 cm。				●		
		78	一之宮神社舞殿上棟棟札	昭和 2 年（1927）	77.7×18.1×1.0 cm。				●		
		79	一之宮神社屋根葺替棟札	昭和 7 年（1932）	69.0×11.7×0.7 cm。				●		
		80	一之宮神社本殿上棟棟札	昭和 13 年（1938）	77.8×17.8×0.8 cm。				●		
		81	一之宮神社拝殿上棟棟札	昭和 13 年（1938）	85.3×21.0×1.1 cm。				●		
		82	一之宮神社棟札	不明	114.6×19.4×2.0 cm。				●		
		83	市之宮大明神社建立棟札	寛文 7 年（1667）	板坂区蔵。一之宮神社の棟札。総高 76.5×上 12.2 下 10.3 cm、厚さ 1.0 cm。				●		
		84	一宮神社随神門建立棟札	享保 19 年（1734）	板坂区蔵。一之宮神社の棟札。総高 64.8×上 15.0 下 14.5 cm、厚さ 0.5 cm。				●		
		85	一宮神社祝詞殿上棟棟札	大正 2 年（1913）	板坂区蔵。一之宮神社の棟札。総高 106.2×上 18.5 下 18.7 cm、厚さ 1.0 cm。				●		
		86	転読大般若経奉納札	不明	板坂区蔵。一之宮神社の棟札。総高 54.8×上 9.0 下 8.3 cm、厚さ 0.8 cm。一之宮神社において大般若経の転読が奉納されたことが分かる棟札。				●		
		87	諏訪大明神建立棟札	元禄 5 年（1692）	應聖寺蔵。諏訪神社の棟札。総高 63.8×上 12.7 下 12.1 cm、厚さ 1.5 cm。諏訪神社は末社十社を数える一之宮神社の末であり、江戸時代、應聖寺は一之宮神社の別当であった。				●		
		88	持仏堂寄進棟札	元禄 16 年（1703）	應聖寺蔵。諏訪神社の棟札。総高 94.6×上 11.1 下 10.9 cm、厚さ 0.7 cm。諏訪神社の別当であった長野の栄福寺は、應聖寺の末寺で、その隠居寺であったため、棟札を所蔵。				●		

※歴史文化ものがたり：①学問・芸術文化のふるさと、②郷土の暮らし、③ため池・疎水と生業、④祭りと信仰、⑤人・物・情報の十字路、⑥播磨のなかのふくさき

板　　坂

分類		名称		年代	概要	歴史文化ものがたり					
						①	②	③	④	⑤	⑥
美術工芸品	書跡・典籍・古文書・歴史資料	89	諏訪神社遷宮供養大般若経奉納棟札	文化 9 年（1812）	應聖寺蔵。諏訪神社の棟札。総高 66.7×上 15.1 下 14.1 cm、厚さ 0.7 cm。神社の遷宮が行われ、遷宮に大般若経が奉納されたことが分かる。				●		
有形の民俗文化財	祭具	90	屋台（板坂区）	－	布団屋根型屋台。140 年地区に受け継がれてきた屋台。屋台は、「四軒繁垂木」で、千本垂木とも言われ、通常より一段多い四段に配列されている。				●		●
		91	花御堂	享保 20 年（1735）	應聖寺蔵。享保二十年の銘がある。5 月 8 日の花祭り会で、釈迦誕生仏を安置して種々の花で屋根を葺き飾る小さな堂。				●		
	その他の有形の民俗文化財	92	力石（一之宮神社）	不明	1 個。51×40×32 cm。切付無し。				●		
無形の民俗文化財	年中行事・民俗芸能	93	秋祭り（福崎）	－	福崎地区・高岡地区の屋台 13 台（布団屋根型 6 台、神輿屋根型 7 台）が二之宮神社に集まる。本宮では、宮元である山崎屋台が 12 台の屋台を JR 福崎駅前へ迎えに行き、福崎駅前で屋台が練り上げられた後、二之宮神社に宮入りする。拝殿で神事が行われ、五穀豊穣が祈願された後、宮出しが行われる。山崎の木方による合図で一斉に屋台が動きだし、練り合わせを行う「13 台サラバ練り」は見どころである。かつては高岡第一の大社である高岡神社（元文元年（1736）一宮神社と改称）の祭礼であり、福田村の御旅所に一宮神社（板坂）を先頭に各村の屋台が集まって「渡御式」を行ったが、現在は二之宮神社にて祭礼が行われる。			●	●		●
		94	初詣	－	1 月 1 日に應聖寺、一之宮神社で行われる。12 月 31 日の除夜の鐘に引き続き参拝者がお参りする。				●		
		95	トンド	－	1 月 14 日に隣保ごと 6 カ所及び應聖寺の計 7 か所で行われる。				●		
		96	愛宕祭祀	－	1 月 24 日、愛宕山山上の石像前で、板坂区の一部住民（1 隣保）により実施される。				●		

※歴史文化ものがたり：①学問・芸術文化のふるさと、②郷土の暮らし、③ため池・疎水と生業、④祭りと信仰、⑤人・物・情報の十字路、⑥播磨のなかのふくさき

分類		名称		年代	概要	歴史文化ものがたり					
						①	②	③	④	⑤	⑥
無形の民俗文化財	年中行事・民俗芸能	97	大日堂大般若転読会（春）	－	1 月 28 日に應聖寺祈願堂で行われる。元は大日堂で行われていたため「大日さん」と呼ばれる。大般若経 600 巻を、春と秋に 300 巻ずつ年 2 回に分けて転読する。五穀豊穣・農耕安全を祈るため、昔は牛馬を連れてお堂の周りを廻り、安全を祈願した。現在も、古来のお札を刷り、祈願後に配布する珍しい伝統を伝える。区の行事として実施している。				●		
		98	一之宮神社大般若転読会（春）	－	2 月 1 日、一之宮神社にて、古来別当職にあった應聖寺住職ほか近隣の天台宗僧侶計 3 名で大般若経 600 巻のうち、前半の 300 巻が転読奉納される。後半は秋に転読奉納される。神前での読経という「神仏習合の古例」を創始以来約 300 年間継承する伝統行事である。区の行事として実施している。				●		
		99	採燈（節分）	－	2 月 3 日夕方から 4 日昼にかけて、一之宮神社で行われる。前日夜に節分祈願祭が神主・村役員により行われる。当日午後 4 時頃には採燈のために組まれた木組みに点火され、翌日の昼頃まで燃やされる。この火にあたることで、無病息災に資すると言われる。				●		
		100	初午稲荷祭	－	2 月初午の日に一之宮神社境内の稲荷神社で行われる。春の農事に先がけて、豊年を祈る祈年祭の意味で行われている。また、「初午」は「すばしっこい」とのことで、「二の午」の日に行われることもある。稲荷神社の例祭であるが「一之宮神社大般若転読会」と同様、一宮神社　別当職の應聖寺住職により、大般若経 100 巻が転読奉納される。			●	●		
		101	金毘羅祭	－	3 月 10 日に金毘羅神社で行われる。神社前の平地では、かつては奉納相撲が行われていた。				●		
		102	湯立（夏越の祓い）	－	7 月下旬に一之宮神社で、二之宮神社神主と村役員で行われる。塩湯で身を浄め、氏子の無事を祈る。				●		

※歴史文化ものがたり：①学問・芸術文化のふるさと、②郷土の暮らし、③ため池・疎水と生業、④祭りと信仰、⑤人・物・情報の十字路、⑥播磨のなかのふくさき

板　坂

分類		名称		年代	概要	歴史文化ものがたり					
						①	②	③	④	⑤	⑥
無形の民俗文化財	年中行事・民俗芸能	103	盆祭り（盆踊り）	－	8 月 14 日夕刻に公民館前の広場で行われる。踊り場の中央に櫓を組み、その廻りを村人が躍る「輪踊り」である。				●		
		104	地蔵盆	－	應聖寺祈願堂南の地蔵堂にて、堂内を飾り、お菓子を備えて奉る。8 月 24 日の地蔵縁日に行われ、当日は、お経や御詠歌に合わせて数メートルある大きな数珠を参加者全員で繰っていく「数珠繰り」により進行する。				●		
		105	お大師さん（大師堂祭り）	－	4 月 21 日（春）と 8 月 21 日（秋）の 2 回、東山大師堂で行われる。村内で、当番持ち回りで世話をし、般若心経を奉納した後、茶菓子をふるまう。				●		
		106	大日堂大般若転読会（秋）	－	8 月 28 日に應聖寺祈願堂で行われる。元は大日堂で行われていたため「大日さん」と呼ばれる。大般若経 600 巻を、春と秋に 300 巻ずつ年 2 回に分けて転読する。春季の前半 300 巻につづき、後半の 300 巻が転読奉納される。区の行事として実施している。				●		
		107	一之宮神社大般若転読会（秋）	－	9 月 1 日に一之宮神社で行われる。一之宮神社において應聖寺住職ほか計 3 名で、大般若経 600 巻のうち春季の前半 300 巻につづき、後半の 300 巻が転読奉納される。神前での読経という「神仏習合の古例」を創始以来約 300 年間継承する伝統行事である。区の行事として実施している。				●		
遺跡	散布地・集落跡・生産遺跡等	108	林谷遺跡	縄文時代～中世	縄文時代の遺物が出土しているが、明確な遺構は確認されていない。南側には炭・焼土を伴う、古墳時代から中世にかけての集落跡の遺構が確認されている。		●				
		109	雨田遺跡	平安時代	平安時代の遺物の散布地。		●				
		110	矢口遺跡	奈良時代～中世	官人の身分を証明する道具の一つである金銅製の帯金具を出土。また、掘立柱建物の遺構も検出され、奈良時代から中世にわたる遺跡であることが確認されている。		●				

※歴史文化ものがたり：①学問・芸術文化のふるさと、②郷土の暮らし、③ため池・疎水と生業、④祭りと信仰、⑤人・物・情報の十字路、⑥播磨のなかのふくさき

分類		名称		年代	概要	歴史文化ものがたり					
						①	②	③	④	⑤	⑥
遺跡	古道・街道等	111	西国三十三所巡礼道	－	二十七番札所書写山円教寺から二十八番札所成相山成相寺へと続く道。江戸時代を中心に多くの巡礼者が歩いた。				●	●	
		112	七種道	－	七種川を通り高岡地域や田口へ続く道。この道を示す道標が現在もいくつか確認されている。					●	
名勝地	庭園	113	應聖寺庭園	－	本堂・書院の背山斜面を築山とし、左手に滝を組み山裾に細長い池をめぐらす池泉観賞の庭である。滝は高低差 4m 余りの渓流と瀑布を連ねたもので立体的な配石によって構成され、池の石橋は自然石の二橋を沢飛石で繋ぐ変化を見せている。また、園池から築山にかけての石組は土留めをかねた崩れ石積風となり、いわゆる三尊石風の石組をまじえて連続させた立石は本庭園の特色である。初夏の青モミジ、晩秋の紅葉など、訪れる人が絶えない。【県指定名勝】		●				
	河川・滝	114	七種川	－	七種の滝を源として南流し、市川に合流する。延長 5,924m。かつては大雨が降る度に洪水を起こした。普段はほとんど水がなく、「七種川と水の話」という民間説話が伝わる。		●				
		115	大内川	－	延長 2,600m。初夏にはホタルが舞う風景が見られる。		●				
		116	矢口川	－	延長 495m。矢口のため池から大内川に注ぐ。		●				
動物・植物・地質鉱物	植物	117	應聖寺のハナノキ	－	應聖寺境内に生育する。カエデ科カエデ属の落葉高木。春の桜の頃、葉が展開する前に赤い花を咲かせる。愛知県以西に生育する例は極めて珍しい。【町指定保存樹】		●				
		118	沙羅の古株（應聖寺）	－	現本堂の西数mの位置に、平成 8 年（1996）まで沙羅の大木が隆々と茂っていた。推定樹齢は約 300 年であり、江戸時代中頃に植えられたものと考えられる。		●				

※歴史文化ものがたり：①学問・芸術文化のふるさと、②郷土の暮らし、③ため池・疎水と生業、④祭りと信仰、⑤人・物・情報の十字路、⑥播磨のなかのふくさき

板　　坂

分類		名称		年代	概要	歴史文化ものがたり					
						①	②	③	④	⑤	⑥
動物・植物・地質鉱物	植物	119	沙羅の花（應聖寺）	－	『平家物語』の冒頭で諸行無常の象徴として詠われる沙羅双樹は、「釈迦の入滅」を表し、日本では 6 月頃に咲く。朝咲けば夕方には散る一日花。應聖寺には、かつて推定樹齢約 300 年の沙羅の大木があった。現在は枯渇し、その大木の子孫 200 本が境内に生育している。		●				
		120	サルスベリ（一之宮神社）	－	明治末に現在地に移植されたもの。推定樹齢は 300 年以上。		●				
文化的景観	生活・生業・風土により形成された景観地	121	板坂奥池	－	古くには中池と奥池の二つの池が近接してあったが、明治以降、水不足解消のため、中池の堰堤をかさ上げして貯水量を増やした。奥池の堤は原型をとどめたまま水中に姿を隠しており、水嵩が減少するとその姿を現す。			●			
その他	信仰の場	122	應聖寺	－	天台宗で比叡山延暦寺を本山として、今から 1300 余年前、白雉年間天竺の高僧法道仙人によって開基されたと伝えられる。近年、白鳳時代（7 世紀後半）の銅造誕生釈迦仏が発見され、県内でも最も古い仏像の一つと判断され、当寺は町内でも最も古い寺院の一つであったとみられる。室町時代は赤松氏、江戸時代には姫路藩主や徳川家からの帰依も伺える特別な寺院であったようである。沙羅の花（6 月中旬～7 月初旬）の咲く寺としても有名で、関西花の寺二十五霊場のひとつでもある。				●		
		123	一之宮神社	－	板坂区の氏神。当初は七種山に鎮座していたが、祭祀が不便であるため宮ヶ谷、鳥ノ岡へと遷座した後、大正 2 年(1913)に現在地に遷座した。高岡荘を代表する大社であり、元文元年（1736）に正一位を授与された。				●		
		124	愛宕山の祠	－	愛宕大権現は、三谷奥と峠山の中腹尾根に屏風のような岩を背にまつられている。				●		
		125	地蔵堂	－	江戸時代には巡礼者の宿として利用された。大正 8 年（1919）に巡礼道沿いから少し北へ移設された。				●		

※歴史文化ものがたり：①学問・芸術文化のふるさと、②郷土の暮らし、③ため池・疎水と生業、④祭りと信仰、⑤人・物・情報の十字路、⑥播磨のなかのふくさき

分類		名称		年代	概要	歴史文化ものがたり					
						①	②	③	④	⑤	⑥
その他	寺社の行事	126	採燈大護摩・鬼舞	－	2 月第 1 日曜日に應聖寺において、採燈大護摩法要と一緒に行われる。本来は追儺式と呼ばれる節分行事であるが、應聖寺では同日同時に行われる。山の神（本尊：大日如来・聖観世音菩薩）、赤鬼（不動明王）、青鬼（薬師如来）が現れ、護摩壇の周りで踊り舞い、大地を鎮めて、厄除け、無病息災、家内安全を祈る。				●		
		127	涅槃会	－	2 月 15 日に應聖寺本堂で行われる。お釈迦様が涅槃に入られた様子を描いた涅槃図をかけ、報恩の法要を行う。				●		
		128	彼岸会（春）	－	3 月彼岸結願日（彼岸一週間の最終日）に應聖寺で行われる。大般若経 600 巻が、近隣の天台宗僧侶らによって転読奉納される。				●		
		129	灌仏会（花まつり）	－	レンゲの花で屋根を葺いた小さな御堂に、銅造釈迦誕生仏を祀り、甘茶をかけて、お釈迦様の誕生を祝う。應聖寺では月遅れの 5 月 8 日に行われるが、その理由は、レンゲ、ツツジ等、生の花を集めて「花御堂」を飾るためである。当日は應聖寺の檀家信徒や高岡幼児園・高岡小学校低学年が参加する。				●		
		130	放生会	－	5 月 8 日「花まつり」の前日か翌日に應聖寺で行われる。應聖寺門前の清浄池に鯉の稚魚を放す。高岡幼児園児を招いて行っている。				●		
		131	應聖寺盂蘭盆会（施餓鬼会）	－	8 月 15 日に應聖寺で行われる。近隣の天台宗僧侶 7・8 名が出仕し、「施餓鬼供」を修す。また、檀信徒は、寺に参り、施餓鬼法要に参列し、塔婆回向をし、それを持って 15 日の夕刻、墓に先祖霊を送って行く。				●		
		132	彼岸会（秋）	－	9 月彼岸の結願日に應聖寺で行われる。近隣の天台宗僧侶 7・8 名が出仕し、施餓法要並びに塔婆回向が行われる。				●		

※歴史文化ものがたり：①学問・芸術文化のふるさと、②郷土の暮らし、③ため池・疎水と生業、④祭りと信仰、⑤人・物・情報の十字路、⑥播磨のなかのふくさき

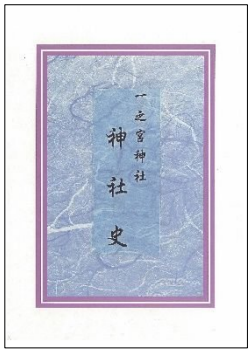
板　坂

分類		名称		年代	概要	歴史文化ものがたり					
						①	②	③	④	⑤	⑥
その他	寺社の行事	133	霜月会（大根炊き・天台会）	－	11 月 24 日に應聖寺で行われる。應聖寺では“中風除け”の「大根炊き」を行い、参集者に振る舞われる。その大根は前日に村中から集められる。一昼夜の調理を経た「大根炊き」の大根と小豆づくしの当日の精進料理は、江戸時代から続く應聖寺の伝統料理である。				●		
		134	除夜（除夜の鐘）	－	12 月 31 日に應聖寺で行われる。檀信徒が集まり、百八煩悩を除去する目的で鐘撞き堂の大鍾を合計 108 回撞き、新年の無病息災を祈る。本堂内では住職が修正会を勤める。				●		
	民間説話・地名・伝承地・屋号等	135	金岩	－	板坂今谷にズリ谷と呼ばれる地があり、昔弁慶が棒で 2 個の金岩を担い、山を登る途中、頂上付近で足を滑らせて担っていた棒が折れ金岩が転げ落ちたという伝説が残っている。奥池の奥にある岩と大内の岩ケ谷入口の岩（後者は既に消滅）がその金岩と伝わる。		●		●		

※歴史文化ものがたり：①学問・芸術文化のふるさと、②郷土の暮らし、③ため池・疎水と生業、④祭りと信仰、⑤人・物・情報の十字路、⑥播磨のなかのふくさき

歴史文化遺産の保存・活用の取組等

・平成 14 年（2002）4 月に『一之宮神社 神社史』、平成 15 年（2003）3 月に地域史誌『板坂村史』を編さんしました。
・一之宮神社については、本殿の修理（屋根の改修、千木・鰹木の修理）、幟・ポールの新調を自治会が中心に実施してきました。また、老人化・婦人会・子ども会が中心となって定期的な清掃を実施しています。
・應聖寺については、應聖寺とその檀家が中心となって、建物の修理、庭園等の維持、庭木の剪定、清掃を実施しています。また、應聖寺では、町内外の俳人・歌人が詠んだ沙羅の花等に関する俳句・短歌・詩歌の碑を多数設置しています（次ページの表参照）。また、詩歌句碑の他にも、境内には昭和 50 年代以降、次のような全国的にも珍しい石造物等が造立されています。
　・不動明王坐像（昭和 58 年造立）：像高 190 ㎝。不動明王坐像を薄彫りしてある。
　・涅槃仏（平成 5 年造立）：全長 750 ㎝の涅槃仏。胴体はサツキの植栽である。
　・仁王像（昭和 60 年頃造立）：像高 185 ㎝。大分県国東半島に見られる仁王石像に似た像である。
　・薬研彫金剛界五仏種子曼荼羅（昭和 55 年造立）：高さ 127 ㎝、幅 122 ㎝の金剛界五仏曼荼羅碑。
　・應聖寺石標（平成 7 年頃造立）：県道 407 号線と應聖寺参道の交差点に位置する。
　・金剛蔵王権現像（平成 17 年造立）：大峰修行 67 回登攀を記念し、大峰修行大先達の柴田十四一氏と柴田正幸氏が造立したものである。
　・仏足石（昭和 55 年造立）：全国で唯一、沙羅双樹の樹下に設置されている。
・自治会と消防団が中心となって、屋台の維持・修理、本棒・脇棒・ふとん屋根、太鼓、幕、提灯等の新調等を実施しています。
・板坂区秋祭り屋台保存会を組織し、秋祭り屋台太鼓教室など地域の伝統事業を後世に継承するための取組を実施しています。
・自立（律）のまちづくり交付金事業を活用して、地域の昔に触れる巡礼道ウォークを実施してきました。



『一之宮神社 神社史』の編さん

『板坂村史』の編さん

應聖寺の詩歌句碑

板　　坂

應聖寺の主な詩歌句碑

	名称	内容
1	初井しづ枝　歌碑(1)	「ぜんまいの　葉かげにおもく　袋垂り　命をつつむ　モリアオ蛙」 ※初井しづ枝(明治 33 年～昭和 51 年（1900～1976))：姫路市出身の女流歌人。「女人短歌」の創立に参加。「コスモス」創刊に参加。
2	初井しづ枝　歌碑(2)	「咲ききりて　ちりゆくはなの　さみしさも　知りつつ娑羅の　木下におりぬ」
3	伊丹三樹彦　句碑(1)	「沙羅仰ぐ口端　自ずと　花白の語」 ※伊丹三樹彦(大正 9 年～令和元年（1920～2019))：兵庫県出身の俳人。「青玄」主幹。現代俳句協会副会長、同顧問、「青群」顧問等を務めた。
4	伊丹三樹彦　句碑(2)	「一の夢　二のゆめ　　三の夢にも　沙羅」
5	伊丹三樹彦　十句碑(3)	『涅槃釈迦』　「涅槃釈迦成る　入魂の鑿(のみ)と鎚(つち)」、「日曝(ざら)し雨曝しも嘉し　涅槃釈迦」、「一山の沙羅咲き継ぎて　涅槃釈迦」、「蹠(あうら)まで揃えて　涅槃釈迦豊か」、「寝仏に睡蓮の昼　沙羅の宵」、「花衣経ての葉衣　涅槃釈迦」、「涅槃釈迦　膝下に鯉を遊ばせて」、「釈迦涅槃　一番鶏を聞き給う」、「寝仏に誓いて　僧の子は僧に」、「涅槃釈迦を横目　不動の金剛立ち」
6	伊丹公子　句碑	「　天界へ咲きつぐ　沙羅の　花のいろ　」 ※伊丹公子(大正 14 年～平成 26 年（1925～2014))：俳人。「青玄」主要同人。神戸新聞俳句撰者。
7	應聖寺詩歌碑林碑	應聖寺の沙羅大樹の存在を知り、昭和 40 年当初、多くの文人墨客が訪れるようになった。應聖寺と沙羅を愛した昭和 40 年、50 年代に来寺した比較的古い時代の詩人、歌人の歌碑 20 数基を総称して「應聖寺詩歌碑林」(第一詩歌碑林)と呼んでいる。中国陝西省西安市の孔子廟にある「碑林」をモデルに考案された。
8	第二詩歌碑林碑	伊丹三樹彦を師と仰ぐ、「青玄」同人や門下生、弟子達が、次々に三樹彦の句碑を取り囲むように句碑を建立した。凡そ、「青玄」同人の 28 基の句碑が建つ。それらを総称して「第二詩歌碑林」と呼んでいる。
9	斎藤茂吉　歌碑	「いにしへも　今のうつつも　悲しくて　沙羅双樹の花　散りにけるかも」 ※斎藤茂吉(明治 15 年～昭和 28 年（1882～1953))：歌人、精神科医。
10	山崎為人　句碑	「僧房の　夢にも散るか　娑羅の花」 ※山崎為人：俳人。「寒雷」主幹。
11	木村真康　歌碑	「あした咲き　夕べは散ると　いう花の　いのち清(すが)しき　山寺の沙羅」 ※木村真康：福崎町出身の歌人。「文学圏」主幹。
12	飛松實　歌碑	「ここざくの　つぼみなおもち　散りながら　庭に散りしく　沙羅の白花」 ※飛松實：歌人。毎日新聞短歌撰者。
13	今村喜翁　句碑	「掌から湧く　遠き日月　娑羅の花」 ※今村喜翁：俳人。「デルタ」主幹。
14	下村非文　句碑	「天台の　寺より高く　沙羅咲けり　」 ※下村非文：俳人。「さざんか」主幹。
15	平松措大　句碑	「沙羅さかり　葉蔭に光る　蕾秘め」 ※平松措大：俳人。「さざなみ」主幹。
16	岸原広明　歌碑(1)	「閑また寂　聴ゆるはただ　これ真如のみこえ」 ※岸原広明：歌人。文学圏同人。應聖寺 33 世住職桑谷祐海和尚の弟子。加西市北条町の五百羅漢寺住職。
17	岸原広明　歌碑(2)	「沙羅の花　いのち短く　咲くものを　朝々見上ぐ　いとしさ秘めて」
18	桑谷祐廣　句碑	「散る沙羅も　また副紋ぞ　仏足跡」 ※桑谷祐廣：應聖寺 34 世住職（昭和 7 年～平成 15 年（1932～2003))。
19	大橋敦子　句碑	「沙羅落花　大地に梵字　こぼすかな」 ※大橋敦子(大正 13 年～平成 26 年（1924～2014）)：女性俳人。俳人大橋櫻坡子の長女。「雨月」名誉主幹。
20	川口汐子　歌碑	「石の上に　ひたと音して　沙羅の花　おちたるままに　こよなくしろし」 ※川口汐子(大正 13 年～平成 23 年（1924～2011))：歌人、児童文学者、元姫路市教育委員長。
21	佐治清千之　句碑	「沙羅一花　膝に石仏　微笑して」 ※佐治清千之：福崎町福田在住。俳句、彫刻(能面と仏像)を良くする。
22	石橋妙子　歌碑	『散華白光』「假の世に　重ぬる旅の　果て如何に　咲ききる娑羅の　白栲仰ぐ」、「咲きつぎて　仄か明るむ　娑羅のもと　ひとつ魂なほ　研ぎゆかな」、「移らふは　時のみならず　虚しきは　愛のみならず　娑羅の花散る」、「垂直に　落ちたる娑羅の　無傷なり　纏ふ光を　手のひらに享く」、「てのひらに　娑羅の落花を　賜ひたり　色即是空　空即是色」、「散る娑羅を　さけて歩める　夕光の　たどたどしかり　常寂光土」、「夢魔のあひに　散る娑羅あはし　拾へども　ひろへども掌に　残らざりしよ」 ※石橋妙子(昭和 4 年（1929）～)：歌人、兵庫県歌人クラブ幹事。「花鏡」主幹。

※應聖寺境内には、上記の詩歌句碑の他にも、数多くの詩歌句碑が建立されています。